

家庭科における 系統的・領域横断的な授業の改善と教員に対する効果的な研修方法の検討

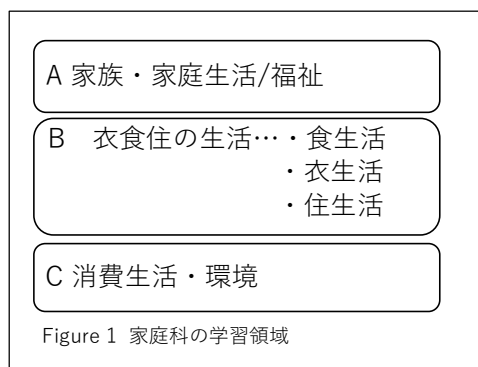
◎倉持清美（教育実践創成講座）○萬羽郁子（生活科学講座）渡瀬典子（生活科学講座）藤田智子（生活科学講座）塚崎舞（生活科学講座） 星野亜由美（生活科学講座）石津みどり（附属小金井中）西岡里奈（附属小金井小）栗原智美（附属高等学校）菊地英明（附属国際中等）神澤志乃（附属竹早中）

代表者連絡先：kkiyomi@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】 家庭科 領域横断 授業 研修

1 問題と目的

家庭科の学習内容は、小中高等学校を通して、A 家族・家庭生活、B 衣食住の生活、C 消費生活・環境の3つに区分され、系統的な学習を行うことと、各領域を相互に関連させて学習を行うこととされている。家庭科の学習対象である生活を考えたとき、これらの領域は独立したものではなく、互いに関連しあうものであり、複合的な視点で学ぶことでより学びが深まるからである。領域横断的な学習は、予測困難で先の見えない時代に生きていく子どもたちにとって、「生活」という絶対的な正解のないものに対して、複合的な視点で考えていく課題解決的な学習のスタイルといえる。また、家族が多様化するなか、家庭での実践が難しい子どもたちにとって、領域横断的に学ぶことは、学校での実践の機会の確保や仲間との学び合いを通じて様々なやり方を知ることにもなり、子どもたちが自立し他者と助け合いながら生きていく力を身につけることにつながる可能性がある。



しかし、現行の学習指導要領では、小中高等学校を通して、領域横断的な方法での具体的な指導例は示されておらず、また、中高の教科書はFigure1に示すように5つの領域別の構成となっていることから領域ごとの指導が中心となりがちである。そこで、生活・地域・社会課題の解決に繋がるような領域横断的な方法で授業を開発し、提案できないかと考えた。そのために、まずは学習指導要領の変遷を検討し、領域横断的な考え方の現状を捉えた。

本報告書では、学習指導要領の記述の変遷と、開発した領域横断的な授業について現職教員に研修した成果を中心に報告する。

2 本プロジェクトの実施

(1) 家庭科学習指導要領の変遷～保育学習の領域横断に着目して

家庭科学習指導要領の変遷を検討することで、領域横断の授業について示唆を得られるのではないかと考えた。特に、家庭科の領域を横断して学ぶことで子どもたちの健やかな成長と安心安全につながるような知識と技能を持てる、あるいは持つ必要性に気が付くことができる保育領域に着目し、分析を行った。分析対象は、学習指導要領解説において指導内容が詳細に書かれるようになった昭和44(1969)年以降から現在までの、中学校家庭科学習指導要領と中学校家庭科学習指導要領解説である。

Table1 中学校家庭科学学習指導要領の変遷

告示 年度	目標
昭和 44(1969)年 女子向き 3 学年	「保育」の内容は、主として学年目標の(3)を達成するためのもので、 <u>幼児の心身の発達、幼児の遊びを中心とした生活、幼児の衣生活、幼児の食生活、保育の環境との関係の5項目で構成されている。これらの内容は、幼児の遊び、衣生活および食生活に関する実習題材を中心として、相互に有機的な関連を図り、総合的に展開するよう指導する。</u>
昭和 52(1977)年	(中略) この学習では、 <u>遊び道具、遊び着、間食など生徒の発達段階に適した具体的な製作を通して、幼児に対する理解や関心が更に深められるようにする。</u>
平成元 (1989)年	「保育」では、 <u>幼児の遊び、食物及び被服に関する学習を通して、その心身の発達に応じた生活や環境について理解させ、幼児に対する関心を高める</u> ことを主な目標としている。 幼児の心身の発達については、幼児の身体の発育や運動機能、言語、情緒、社会性の発達の特徴を理解させることをねらいとしている。 <u>幼児の生活については、遊び道具、簡単な間食や被服の製作を通して、保育の重要性に気付き、幼児と触れ合い、幼児に対する関心を高めることをねらいとしている。</u>

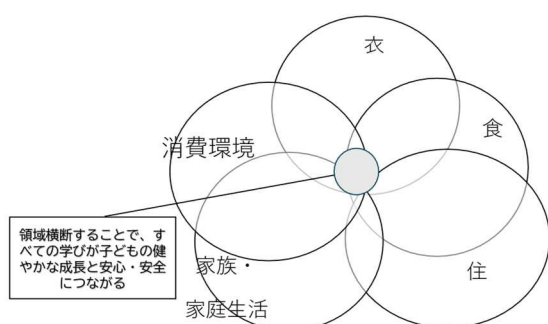


Figure 2 領域横断的な学び

その結果、平成元(1989)年までは、保育学習の目的として、衣生活・食生活との関連を図り、幼児の生活や環境について理解していくことが書かれていることが分かった。しかし、平成10年(1998)以降の学習指導要領では、このような文言は見られなくなっている。平成29(2017)年には、「家族・家庭生活についての課題と実践」において、「「B 衣食

住の生活」や「C 消費生活・環境」との関連を図り、家族、幼児の生活又は地域の生活の中から問題を見出して課題を設定し、様々な解決方法を考え、計画を立てて実践した結果を評価・改善し、考察したことを論理的に表現するなどの学習を通して、課題を解決する力と生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を養うことをねらいとしている。」と書かれている。生活の課題を見出すための手段として領域を関連付けることが述べられている。

実際に家庭科の保育学習では、子どもが安心して安全に健やかに過ごすために必要な技能や知識を身につける、あるいはその必要性に気づくためにはFigure 2のように、家庭科の学びを領域横断していく必要があると考える。

(2) 現職教員との領域横断的な授業の検討会

①領域横断の授業の実施

社会的課題を取り上げ、解決のために複数の領域で学習したことが活かせるような、領域横断的な授業を考えることにした。教員が教えることに苦手意識を持ちやすく、また取り上げる時間数も少ない住生活領域と、比較的生徒が興味を持ちやすい保育領域とを横断するような高等学校家庭基礎の授業を検討した。大学教員とプロジェクトメンバーの附属教員とで意見を出し合い、高校生にとって身近な問題である騒音をテーマにし、保育園騒音問題を取り上げることとした。ジグソー法を応用し、様々な立場から課題や状況を推測したうえで、班ごとに解決方法を考え発表するという流れである。ジグソー法で使う資料等は大学

教員が集め、高校生が理解しやすい内容に構成しなおした。公立学校で実施する場合は、現場の教員からも意見をいただきながら、授業の詳細を検討した。授業の流れはTable 2のとおりである。授業実践後、授業者である教員からは、住生活領域と保育領域を結び付けた学習によって生徒の視野が広がったことや、他者と意見をすり合わせて発表する経験ができたことによる本授業の意義が述べられた。

本授業の内容については、後述の検討会において、授業実践を行った教員から他の参加者（教員）に対して紹介された。また、授業を提案した大学教員から小・中・高等学校の家庭科教員が集まる研究会で授業内容や意図を紹介する研修の機会を得た。参加者の先生方からは、様々な立場で保育園の騒音問題について考える流れや、そのためのジグソー法の資料の情報の豊富さや多くの観点を含んでいることについて関心を寄せられた。また、グループでの話し合いや発表方法についてはその学校での日頃の授業方法や雰囲気によって工夫が必要なことや、地域特性に合わせた課題変更の必要性についても議論があった。実際にいくつかの学校から本題材を実践したいという要望があり、実践校に合わせたアレンジを加えながら実践を重ねている。実践やそれに向けた大学教員との打ち合わせ等を通して、本題材の意義が広がっている。

②領域横断の授業の検討会

家庭科の授業の検討会を2回実施した。検討会の参加者は、附属学校の教員も含めたプロジェクト員と、公立学校及び他の国立大附属校の小中高等学校の家庭科教員である。参加者の詳細は、Table3のとおりである。2回とも、領域横断的な授業実践の概要を参加者から報告してもらった上で、家庭科の学びを深める手段としての領域横断とは何かを話し合った。①で述べた領域横断的な授業についても2回目の検討会で報告・検討した。

参加者には、領域横断的な授業について、自身の取り組みの状況を検討会前に尋ねた(Table 4)。その結果、領域によって横断させたことがあるかどうか差があることがわかった。特に、内容区分Bにあたる食生活・衣生活・住生活を領域横断させた経験のある教員は少なかった。また、領域横断といった場合も、関連する事項について軽く触れるといった形での関連付けがほとんどであった。

領域横断的な学びを行う意義を尋ねた結果を、Table5に示した。反復して学ぶことによる「知識の定着」や「思考の深まり」などのほか、「実生活に近づける」「生活者としての学び」といった意見も見られるものの、「時間短縮」といった教員の物理的な面からの必要性という考えも複数の教員にみられた。

Table 2 授業概要 (高等学校家庭基礎2時間×2週間＝計4時間)

時間	主な学習活動
1時間目	- 音の問題に関心を持ち、保育園の騒音問題について知る。 - 保育園はどのような場所なのか、どうして必要なのかを考える。 - 題材を貫く問いの提示。
2時間目	知識構成型ジグソー法を応用し、様々な立場から騒音問題や騒音対策に関する情報を集める。
3時間目	班ごとに提案書を作成する。
4時間目	- 作成した提案書を用いて発表をする。 - 題材を貫く問いについてまとめる。

Table 3 参加者(調査対象者)

(人)

	経験年数				
	5年未満	5～10年	11～20年	21年以上	合計
小学校	—	1	1	1	3
中学校	1	3	—	3	7
高等学校	1	2	1	2	6
中等教育学校	—	—	—	2	2
合計	2	6	2	8	18

※現在の勤務先であり、過去に他の校種に勤務した経験のある者を含む

※高等学校には、現在は教育委員会所属の教員も含む

※ほかに大学教員6名が進行役・記録係として参加した

Table 4 領域横断的な授業の実施状況【事前調査・複数回答】

指導要領上の内容区分	A	B			C
横断させたことのある領域	家族・家庭生活	食生活	衣生活	住生活	消費・環境
主とする領域					
家族家庭生活		10	6	8	5
食生活	10		1	0	9
衣生活	5	1		0	9
住生活	8	1	1		6
消費・環境	2	9	9	7	

(人)

2回の検討会後、領域横断といったときに教員が行うことが多い領域横断を意識した授業と、今回①で紹介したような複数の領域にまたがる授業との違いについて自由記述で書いてもらった(Table 6)。

領域横断を意識しただけだと、知識や技術の習得や、片方の分野への理解や考えが深まる、また教員側は意図していても、生徒には理解されない可能性もあるといった意見が見られた。一方、複数の領域にまたがる形で領域横断を行うことで、実生活に近い課題設定となり、自分事として感じられ、学びが広がったり深まったりすると考えられる。どちらの分野に

についても理解や考えが深まるといった意見や、生徒自身が複数の領域に関する知識・技能を用いて思考していると実感でき、主体的に学びに取り組むことができると考えられていた。

2回の検討会のあと、複数の領域にまたがる授業を実践したいか尋ねたところ、全員が実践したいと回答した。しかし、やりたい気持ちはあるが、現場の教員だけでは時間が足りず授業を開発・実施するのは難しい、教材のパッケージ化をして欲しいという声が検討会の中で多く聞かれた。

領域横断を行う際に、「子どもの実態に合わせる」という考えよりも、「時数におさめる上で役立つ」という考えが先行することが多かったが、この検討会を通して、領域横断をすることが、つなげるだけではなく、視点を広げ、深い学びを引き起こす可能性について、理解することができたようだった。また、領域横断の授業をする際、家庭科は扱う内容が広く、また社会の変化に伴い変わっていくこともあるため、専門的な資料や最新の情報などは大学教員が家庭科教員と相談しながら作成できることがわかった

3 課題（又は成果、提言、提案等）

領域横断的に授業を展開することで、様々な人々と協働しながら自分・家族・地域の生活を主体的に創造しようとする生徒の実践的態度を深められることが、開発した授業実践からわかった。家庭科の実情を考えれば、各学校に家庭科の教員が一人という状況も多い中で、教員と大学が連携して、授業を作っていく可能性も、示すことができた。家庭科教員養成の計画養成が実施されていない地域も見られることから、教員養成の基幹大学として、家庭科教育の質を高めるような研修や、教材の提供を行っていくことが求められていると考えられる。今回の取り組みが、功を奏したことから、今後も、社会的な課題に即した授業を提案していきたい。

Table 5 家庭科において領域横断的な学びを行う意義【事前調査】

①時間短縮 ②家庭科の系統性の学びを俯瞰できる機会
・家庭科の学びは生活全体に及び、様々なことがつながって生活が成り立っているということに子どもが気づくのに役立つ。
・少ない授業時間でも、学習指導要領の項目を盛り込んでしまうことができる。
時間数が少ない点と学習内容の理解を深めるため。
知識の繋がりが増えること。
知識:知識を反復して学ぶことで定着度を上げる。 思考:知識を活用する場面を増やし、思考・判断・表現力を伸ばす。 意欲:生徒自身の生活に直結しない領域や教科の学びについて、学ぶ必要性を認識させ学習意欲を高める。
知識と思考力の定着のため
家庭科の本来の意義、目的を達成するために不可欠なもの
生活者として、必要な資質を総合的に学ぶこと
領域横断的な学びを意識して授業を行うことで、子どもたちの実生活に近づけることができる点だと考えます。

Table 6 複数の領域にまたがる授業と、領域横断を意識した授業との違い【第2回検討会後調査】

実生活はあらゆる領域の内容を含むので、複数の領域にまたがる授業が実生活に近い課題を自分事として感じられるが、領域横断を意識しただけだと都合の良い点だけ触れることになり、広がりや深みは複数の領域にまたがる授業ほど、深くならないのではないかと。
複数の領域にまたがることで、 <u>どちらの分野についても理解が深まり、考えが広がる</u> 意識した授業だと、片方の分野を深めるためのツールのような
領域横断を意識した授業では知識や技術の習得に効果的で、複数の領域にまたがる授業では <u>知識の活用や定着・思考力や主体的に取り組む態度の育成</u> に効果的だと考える。
またがる授業は、 <u>学習者側にも</u> （今日の授業例でしたら、住環境と家族・地域） <u>複数の領域内容が学習できるイメージ</u> で、横断を意識した授業は、授業者の方で、少し加える（例えば食品の選択に消費・環境）イメージでしょうか。
「またがる」というのは、 <u>生徒が複数の領域に関する知識・技能を発揮していると実感できる授業で</u> 、「意識した」というのは、 <u>教員が話題として触れる程度で、生徒の意識付けまでは難しい可能性のある授業かな</u> と思います。
題材における目標設定が変わると思います。